
俺、元ヒーローっす。

仙崎 龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺、元ヒーローっす。

【Nコード】

N4844T

【作者名】

仙崎 龍牙

【あらすじ】

これはあったかもしれない未来

ヒーローはアイドルのように毎日お茶の間にぎやかす存在になっていた

数年前、突然現れた人間を改造して作られた通称怪人を率いて世界征服を狙う数多くの悪の組織が突然現れた

各企業はそれに対抗して、強化服 通称スーツなどの武器を開発した
それをまとうて戦うものをヒーローと呼んだ

これはそんな時代の一人の元ヒーローの物語

ブローグ

「キミ、今日でクビね」

朝一番にハゲの上司から突然告げられた言葉。これで15回目のクビ。うち一回は自主退職だから実質14回目かー。などというどうでもいいことが頭をよぎる

俺が反論をしようとしたら上司が俺の顔の前に人差し指を立ててこういった。

「文句も言い訳も聞きたくないからさっさと荷物まとめてくれないかなあ。ああ、これは退職金ね。今月分の給料と一緒にしておたから。そのダンボールの中はキミの私物ね」

そっいつて俺にダンボールを投げつけ、机に薄っぺらい封筒を置いた

俺は封筒とダンボールを持ち、会社を後にした

無力な英雄（ヒーロー）

ダンボールを片手に通勤、通学ラッシュでにぎわっている大通りをフラフラと歩く

（次の仕事、どっかに転がってねえかな・・・）と思いながら公園のベンチにドカッと座り込む。目の前には迎えのバスを待っている幼稚園児がじゃれあっている。後ろのとおりには会社には遅れないように早足で歩いているサラリーマン

「俺、なにやってるんだろ・・・」

無意識のうちに昔、ヒーローのときに使っていた腕時計型変身道具ウォッチをいじっていた。

「なあ！ 昨日のアレ！ みたか!？」

「みたみた！ レインボーレンジャーだろ!? かつこよかったなあ！」

子供同士の無邪気な声が耳に届く。

（俺みたいな人間になるなよ）

心の中でつぶやいてベンチから立ち上がろうとしたと同時に後ろからビルが崩れる音がした。

そしてあちらこちらから悲鳴や血の匂い。

「誰か助けてくれ！ 悪の組織が攻めてきた！」

誰かが叫ぶ その声も悲鳴にかき消されていった

「誰か！ 誰かああ！」

「わああああああああ！」

俺の前をどんどん人が走り去っていく。

（俺もにげねえとな）

俺はダンボールをインドの人のように頭に乗つけて器用に人ごみを避けて走っていく。

逃げる集団の最前列を走っていく俺が目にしたもの それは絶対に思い出したくない光景だった。

人がカラスについはまれたゴミ袋のようにバラバラにされて転がっている そしてまだ形が残っている死体にたかって食らっている複数の黒い人型の化け物 悪の組織の一つ、プレデターの戦闘員であった。

俺は路地裏に逃げようとした。

「お母さん どこ？」

と言う子供の声聞いて足を止めた。

（あーあ また俺の悪い癖が出ちゃったな）

俺はダンボールを投げ捨て走り出す。そして数秒後、背中に痛みが走った。

（俺、ヒーロー辞めたはずなのに何やってるんだろ・・・）

俺は心の中でばやいた

俺は無意識のうちに目の前の子供を抱きしめて守っていた。

「坊主、悪いやつ倒したらすぐにお母さんを探してやる。それまであっちに隠れてろ。すぐにヒーローが助けに来てくれるぞ」

俺は満面の笑みで子供に話しかける。子供は素直に従い、俺の後ろの路地に逃げ、顔を少しだけ覗かせていた

「少しだけ、お仕事させてもらいますかな」

俺はウォッチの出っ張りを押し、右手を前に突き出した。

英雄（ヒーロー）復活

「変身っ！」

俺は叫びと共に突き出していた右腕を後ろに回し、左手を相手を殴るように突き出す。

ウォッチから光があふれ出し、俺の周りを包む。プレデターの戦闘員が危険を感じ俺に攻撃を仕掛けるがもう遅い。戦闘員が殴りかかったとき、すでに変身を終わっていた。

現役時代は企業の支援があつたからあつた装甲も、武器も、今はない。あるのは戦闘補助のAIとほんの少しの強化が施された己の肉体のみ。俺は黒い全身タイツのようなスーツを身にまといながら叫んだ

「正義のヒーロー　ただいま参上！　なんてね」

名乗りと同時に重心を下げ、戦闘員に突っ込む。戦闘員は大口を開けて俺を喰らおうとする。

俺はそいつの横に回りこみ右ストレートを喰らわせ、戦闘員を吹っ飛ばす。

「お前らの行動なんて予想済みなんだよ！」

こっちに気がついたようで襲ってきたもう一体のほうに殴りかかりながら吠える

「おるあ！」

もう一体も壁に埋め込む

「警報 後方より敵」

AIの声が響く あわてて後ろを振り返ると先ほど埋め込んだ戦闘員がこっちへ向かって走ってくる

今度は口をあけず俺に拳を向ける

「おるあ！」

俺は両手を使い戦闘員と組み合う

「警報 後方より敵」

「嘘だろ！？」

叫ぶと同時に後頭部に痛みが走った

それが俺の最期の記憶だった

消された記憶（メモリ）

「ん……。」

目が覚めたと言うことは分かった。　だけど手と足を伸ばそうとしたら『何か』に拘束されていた。　まるで小さい頃に見たヒーローのアニメでヒーローが改造されるシーンのようだ。

辛うじて少しだけ動く上半身を動かし、全身の見える部分のみ確認する。　見える限り服は全部取られているが身体にヘンな機械や怪しげなベルトが付いていたり、人間ではない何かの手が付いていた。　りすることは無い。　まさか改造される前か？　イヤな想像をしてしまつて冷や汗が垂れる。

「おっと目が覚めたようだね。　調子はどうだい？」

部屋の隅から声が聞こえた。　俺は急いで声の聞こえた方に顔を向る。

「これがいいように見えるか？」

「ああ　拘束が邪魔だったね。　改造が失敗して理性が飛んだ時の保険みたいなものだったからね。　普通にやり取りで来て暴れてない所を見ると成功したっぽいね。」

男がしゃべり終えた後パチン　と指を鳴らした。　部屋の中に明かりが付き、両手両足の拘束が消える。　声のした方を見ると眼鏡をかけていて、殴ると折れてしまいそうなほど細い体をした男が白衣を着て立っていた。

「いつまでも裸だと見てるこっちも辛いから」

と言ってもう一つ持っていた白衣をこっちに投げる。それは他に
着るものがないのでそれにそでを通した。

「じゃあこっちから質問するね。君の名前と職業を言ってみてよ。」

「俺の名前は・・・」

ここまで言っただけ違和感を感じる。名前が思い出せない？　そもそもなんで俺はここに居る？　目が覚める前は？　そもそも『俺』は『何』だ？

「その様子だと改造は成功したようだね。」

頭を抱えている俺をみて男は言った。

「とりあえず一般常識を除いた記憶を消去させてもらったよ。君は『素材』はよかったんだけど余計な感情とかあったからね。」

男はそこまで言つと一旦息を吸つた。俺は固まったまま動けなかった。

「今日から君は僕達の『組織』で生きてもらうよ。名前はそうだな・・・『ロウ』と名乗ればいい。君の戦い方は狼そのものだからね。」

男はニコニコしながらそういった。

「記憶をなくしたままっというのも可哀想だからね。頑張れば記憶を少しずつ戻してあげるよ。君の仕事を簡単に説明しよう。僕達が指示する場所を破壊してくれればいい。あと、僕の事は『博士』とでも呼んでくれていいよ。僕も君と同じ記憶を消された人間だからね。」

博士とかいう人間が予想外のカミングアウトをした。しかし俺に動く気力はなかった。

消された記憶（メモリー）（後書き）

しばらくはこっちの方を更新しようと思います。 応援よろしくお
願いします。

鎧をまとう男（ロウ）

「そんな君に早速『仕事』だよ。」

博士が俺に向かってそう言う。そして指を鳴らして上からスクリーンを降ろす。

「今回君はこの建物を壊してくれればいい。」

そこにはひとつの立派なビル。何階あるのか数えるのもめんどくさいくらいでかい。

「君一人にやってもらうわけではない。正確に言うと破壊作業の妨害に来る敵の排除・・・とも言った方が分かりやすいかな？」

確かに俺一人でビルを破壊するのは不可能だ。

「俺以外にどのくらいの数が来る？」

「破壊作業は別の部隊がやるから僕は知らないね。僕の部隊からは君と戦闘員を5人くらい出すよ。今回のリーダーは君だ。」

博士はそう言ったあと俺に向かって何かを放る。俺はそれを慌ててキャッチした。何かと思って確認したらそれは普通のデジタルウォッチだった。その時計を見た瞬間一瞬頭が痛くなった気がした。

「それはパツと見、普通の腕時計だがそれは『ウォッチ』と呼ばれる道具だ。君の武器であり鎧になる。右上の出っ張りを押した

後、『変身!』と言ってみてくれ。」

俺は『ウォッチ』の右上の出っ張りを押す。そして言われたとおりに叫んでみる。

「変身!」

叫びを合図にして腕時計から黒い糸のようなものが噴き出し全身を包む。1〜2秒後 俺の身体の周りには黒い全身タイツのようなものが付いていた。耳元で音声がかう告げた。

「マスター カクニン。 ナマエトセイベツヲイツテクダサイ。」

「言い忘れたけどAIの指示に従って。 君をそのウォッチのマスターとして登録するから。 登録が済んだら最適化されるからまた見た目変わるよ。」

俺は博士の言った通りに行動する。

「名前は『ロウ』 性別は男だ。」

「リョウカイ。 マスターロウ。 トウロクカンリョウ。 サイト
キカ カイシ。」

音と同時に再び糸が溢れ出した。 先ほどと違うところを上げるとしたら糸の色が銀色と言うところだ。

また1〜2秒したとき糸が収まる。 身体を見渡すとさっきの全身タイツのようなものの上から中世の騎士が付いていそうな胴当てとガントレット 足には膝から下を覆うように鎧が付けられていた。

俺が鎧を確認し終えると博士がこう言った。

「君に『ロウ』という名前を付けて正解だったよ。顔が狼みたいになったからね。」

博士はどこから取り出したかは分からないが全身が映りそうな鏡を置く。俺は顔を確認する。そこには狼の顔をして鎧をつけた男が立っていた。

「これが俺の鎧か。悪くないな。頼むぞ。相棒。」

「リョウカイ。コチラコソヨロシクオネガイシマス。マスター
ロウ。」

AIの声も楽しそうに聞こえた。

「鎧もできたことだし『仕事』の時間だね。僕に付いてきて。」

博士はそう言って歩き出した。俺はそのまま走ってついていった。

鎧をまとう男（ロウ）（後書き）

なんか納得いかない。 自分に文才がないのが悔しいです。 感想
や指摘がありましたらお願いします。

作戦開始（スタート）

「君はこれに乗って待機してもらつよ。」

博士が指さしたところを見るとそこには真つ黒な大型のヘリが一台待機していた。

「詳しい事は中で説明するよ。」

博士が乗り込んだ後、俺もヘリに乗り込む。中を見ると黒い全身タイツのようなスーツを着た人間が5人いた。

俺が乗り込んだ後、扉が音を立てずに閉まる。

「さて、そろそろ行こつか。」

博士がそう言うのとフワリと身体が浮き上がる感覚がする。窓を見ると景色が動いていた。

「博士 これはヘリじゃないのか？ なんも音しないぞ？」

博士は一瞬いたずらが成功した子供みたいな顔で笑い、こう言った。

「これはね。この組織の強襲用ヘリコプター 通称 モスキート。音を一切たてず、姿を一切見せずに目的地上空へ突入し、降下させる。今回みたいな作戦に使われる機体だよ。僕が作ったんだ。」

「そんなことはとりあえず置いて作戦の説明をしよう。君た

ちはビルの崩壊と同時に降下。来た敵を迎撃してもらう。それなりに戦ったら撤退の合図を出すからどっかの物陰で変身を解除して。変身する時に押したボタンを押して『解除』といえ解除されるから。ロウはとりあえず一旦変身を解除してこれを着て。」

博士は普通のサラリーマンが来ているようなスーツを俺に投げる。俺はボタンを押し、変身を解除する。

「解除。」

ウォッチに黒と銀の糸が吸い込まれていく。俺はさっきの白衣姿になった。

「この格好でいると多分捕まるな。」

「今更気が付いたのかい？ もうそろそろ作戦開始だ。さっさと着替えたらどう？」

俺はさっさと着替え出す。着替え終わつたと同時にブザーが鳴る。

「作戦場所に到着したみたいだね。10秒後に降下するよ。」

「10、9、8、7、6、5」

カウントが進むと同時にドアが開く。風が中に入ってきて暴れ出す。黒いスーツの戦闘員は立ち上がり、開いたドアの前に立つ。真ん中のスペースが開いていたので俺もそこに進む。

「4、3、2、1」

カウントが進むにつれ足に力が入る。

「0！ 降下！！」

博士の声を合図に俺達は外に飛び出す。派手な爆発音が聞こえた。

俺はウォッチのスイッチを押し、叫ぶ。

「変身！」

先ほど戻った黒と銀の糸が俺を包む。再び『相棒』を身にまとう。

そして、地面に着陸する。ビルがいきなり崩れた事で人がパニックになっている。降りた時に1人踏んでしまったようで地面とは違った感覚がする。

「サクセン カイシ」

相棒の声が作戦開始を告げた。

作戦開始（スタート）（後書き）

うまく表現で来ている気がしない・・・ 誰かアドバイスください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4844t/>

俺、元ヒーローっす。

2011年11月18日10時10分発行